



やくわえ

第七号

第一テーマを顧みて

「第六十回伊勢神宮式年遷宮に対する奉賛運動」をテーマとして取り上げて以来、此の二年を顧みると、自分自身で精一杯つとめた積りであったが、その力不足と反省すべき点が多々あった。

最初の計画は、啓蒙運動から始まり、お白石洗い奉仕、お白石持ち奉仕、遷宮奉仕員等であったが、後にNETテレビ「題名のない音楽会」出演、遷宮記念「東京都氏子青年大会」が追行された。

昨年度はその計画と準備に費し、今年度に全てを集中し実行してきた。昭和四十七年の春と夏に神宮司庁を訪れ、当会の奉賛活動の趣旨を説明して協力を願い、九月には全神協主催による中央研修会（岡山県）の帰途、北川会長以下四名で再度神宮司庁を訪問、お白石洗い奉仕が一応の決定をみたが、日程の都合上、やむを得ず中止となった。緻密な計画と連絡を密にすれば実現出来た筈であったと、残念でならない。

七月の炎天下、総勢二十五名の我々は板垣下の草取り清掃奉仕をした。一段低い隣地に、新装なる素木香る社殿の荘厳さに胸が引締った。二度と拝することが出来ない石垣よりの一望、緑との調和、一点の隙もない日本最古の建築美——。素晴らしいの一語につきる。

八月には二十名でお白石持ち奉仕。にぎりこぶし程のお白石を白布で柔らかく包み、新正殿の柱のもとに奉献。その固く澄んだ清々しい音が縁の中に響く。この音の印象が強くいまなお脳裡から離れない。

十月二日、愈々遷宮の御儀。特別奉拝員として参列させて戴いた。その感動は筆舌につくせない程であった。

「題名のない音楽会」出演の話は小野雅楽会を通じて急に飛び込んできた。舞台に置かれた奉曳車を引く役であった。「伊勢木遣唄」を歌う神領民と共に会員十二名の緊張した顔・顔・顔——

こうして、会員諸兄の協力によって、本会第一テーマも無事終了できましたことを深く感謝する次第である。

(松本記)

神青協中央研修会

に出席して

山本雅道

去る二月十八、九日寒川神社で「神青協二十五周年以後の展望と課題」を主題に中央研修会が開催された。昨年岡山県に続いての出席で、その感想を断片的に述べさせていただきます。先ず参加メンバーを見るとかなりの若手の人もおり又、地方にてはかなり年輩の人も見受けられた。白衣白袴に着替え正式参拝、開会式、講演、分科会とスケジュール通り事が運ばれた。分科会テーマは三つあり、(一)機構改革後の成果と反省(二十周年以後の会充実と今後の問題点を討議し、更には神社本庁及び神社庁の教化体制等に関連して今後の運動のあり方を考える。財政的裏付けは、いかに計るか。(二)指導者育成と後継者対策(三)会活動の活性化は、いつも結論は「人」にある。又神職養成に関しても使命感を持つ青年神職の輩出の有無が今後を決するであろう。本会の活用も含めて考える。(三)各会活動の将来(本会を協議体から脱して積極

的な体制に、という要望は極めて多い。今、それが実現出来るか。各会活動の上で、中央に何を望むか。此れらのうち私は(一)の第一分科会に蔵重総務部長と共に配属され、飛び込み参加で事前の下調べもせず会議に列席、いささか当惑したが、白衣白袴の討議で不断とは別な緊張感がみなぎった。最大の焦点は「神青会」の神社庁機構の中での位置づけの問題で、各県青年会が夫々神社庁教化部(青年部)に属しているか、或は外郊団体としての青年会なのかについて意見が出された。その結果、殆んどが後者の立場にあり、独自の活動を自主的に行っているのが現状である。所が財政的な裏付けとなると全てと云って良い位各神社庁の援助を受け、又会費の徴集も出来ない県もあると聞く。殊に地方にては地理的な隘路、神職の兼職者が多いため活動に限界があるとこの悩みも深刻そのものだった。各県青年会は、神社庁より財政的援助を受けている関係上、良い意味では神社庁の指導協力の下にスケジュールを消化する体制をとっているが、反面神社本庁、神社庁と青年会との関係は「親と子」の

関係であると解釈し、波風は立てないという事勿れ主義の風潮が支配し、先輩の意見を尊重する気運が強く、青年会側からの要望その他の働き掛けが実際の姿に投影されてない点に問題がある様だ。従って、二十周年以後の会充実と今後の問題点の焦点は、若い世代の人々の意見、考え方等とどしどし採用し、実行に移せる神社界の体質改善にある。それには我々青年会員自身の研鑽が必要であり、お互に切磋琢磨し、各青年会の前向きな活動が今後の躍進につながるだろう。それに伴い、財源の確保も会員の自覚に依り解決も可能と思われる。既述した問題は、以前より継続審議されている問題と思う。「今回の研修会には、本庁の役員が挨拶に一人も来ていない」とか「神社庁の理事には、神青会の代表が必ず就任する」といった非難、要望が私の頭の中に今でも残っている。出席者同志の雰囲気は、テーマの単なる机上の空論に終る事無く、実行に移すという若さと気迫が強く感じられた。その様な意味で神社本庁は、青年会の要望理解を求める声を単なる聞き流しに終る事無く、積極的に取り組ん

でいただきたい。短期間の研修会で、実態、内容も異なる各青年会の話し合いから結論は出なかつたが、夫々色々な問題をかかえている事も分かり、青年会の現状と将来を一生懸命考える同志が多数存在し、彼等との接触が出来た点に参加の意義があった。又神青協の今後の運動は、中央と地方の連絡の緊密化、ブロック活動の充実、会費の全納という事も熱心に討議された。以上私の所見である。今後神青会を初め、微力ながらお役に立ちたいと思う。

(都神青会 議長)



今号は第一・第二テーマの報告の形をとった。第二テーマは附録として別刷にし、単独で資料として用いられるように考えた。これを参考に今後の神社発展のために尽力したいものである(神尾)

昭和四十九年三月三十一日

東京都神道青年会

東京都港区元赤坂二二二一三

東京都神社庁内

電話(408)二三六一・九二七七